

# すべての生物との共存のために : 重油自己被害海鳥類の寄生虫調査から

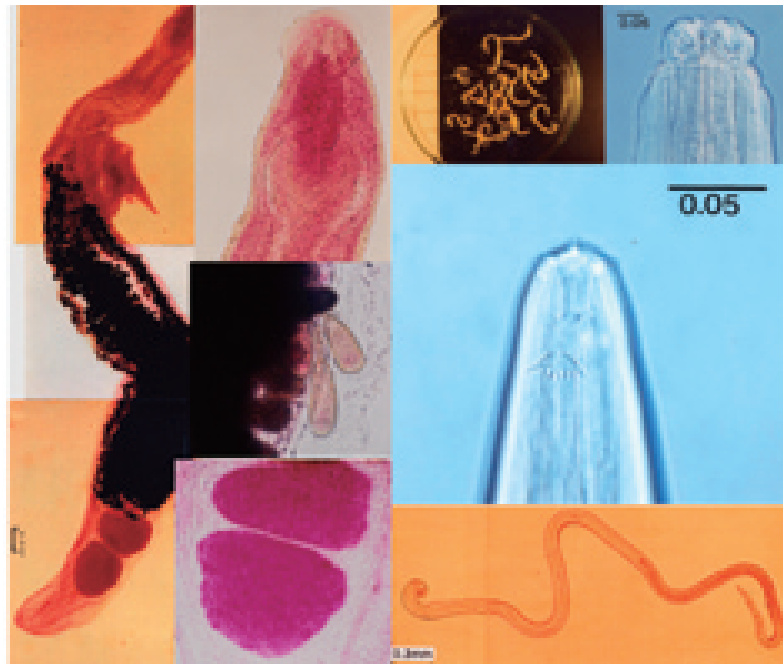
著者	横畑 泰志
雑誌名	10 years after the Nohodka oil spill in the Sea of Japan
ページ	34-35
発行年	2006-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/3253">http://hdl.handle.net/2297/3253</a>

## すべての生物との共存のために ー重油事故被害海鳥類の寄生虫調査から

横畑泰志（富山大学理学部生物圏環境科学科）

1997年にナホトカ号重油流出事故が起こった時、私は一人の動物研究者、特に野生動物寄生虫学の研究者としてこの事故との関係を持つことになった。私には重油流出を防ぐのに役立つ専門的能力はないが、不幸にして命を落とした生物を活用して、別の形で「活かす」ことはできる。そこで、重油被害で死亡した多数の海鳥の内臓を収集し、日本海産の5種（ウミスズメ、マダラウミスズメ、ウトウ、シロエリオオハム、アカエリカイツブリ）、約300羽の鳥から9種の寄生虫（正確には寄生蠕虫類）を検出した。当時、こうした日本近海での海鳥の寄生虫相のまとまった調査は例がなく、得られた結果の大部分が日本海からの、あるいは各々の鳥種からの初報告例となった。例えば、環境省のレッドデータブックで最も絶滅のおそれの高い絶滅危惧IA類に指定されているウミスズメから2種の吸虫と3種の線虫を検出し、そのうち4種がこの鳥からの初報告であった。このサンプルは、単に数が多く、珍しい種であるというだけでなく、鳥が重油に遭遇して死ぬのはその個体の性質よりも運不運に依存する傾向が大きいであろうから、自然集団からほぼ無作意に近い形で抽出されているという利点がある。この貴重なサンプルには、実はまだ未着手のものも沢山残っていて、これからも様々な知見を提供してくれるだろう。

一方、実際には地球上の生物多様性の中で非常に大きな部分を占めていながら、様々な環境保護活動の中でほとんど取り上げられることのない生物も数多く存在する。重油などの流出事故の時にラッコや海鳥などの多くの人の関心を引きやすい動植物の保護だけが大きく叫ばれて、それ以外の目立たない生物や生態系全体の保全には比較的関心が及ばず、努力が傾けられない現状には大きな疑問を感じざるを得なかった。こうした問題は普遍的なものであり、ナホトカ号事故以前から関心を持っていたが、あの事故はさらに私の問題意識を増幅してくれた。「すべての生物との共存」を概念的に訴えるのはたやすいが、そうした目立たない生物の中にも、絶滅のおそれの高いものは少なくない。例えば、ウミスズメのような絶滅危惧生物の寄生虫のうち、宿主特異性が高く、その動物にしか寄生できないものは、同様に絶滅の危機に瀕していることになる。最近私は「寄生生物保全ネットワーク」という集団を立ち上げて、こうした絶滅危惧寄生生物がどのくらい存在するかなどの調査と、ホームページでの情報公開を進めている（<http://yokohata.edu.toyama-u.ac.jp/>；この集団には会費納入などの義務が一切なく、寄生生物の専門家でなくても加入できるので、関心がおありの方はぜひお問い合わせいただきたい）。こうした活動が、人間とすべての生物との共存に少しでも役立てば幸いである。



ナホトカ号重油流出事故の際に死亡した海鳥から検出された寄生蠕虫類（括弧内は検出された宿主）  
 左半分：吸虫の1種Aporchis cf. rugosus（ウミスズメ、ウトウ）、右上2枚：線虫の1種Contracecum rudolphii（全5種）、  
 右中：線虫の1種Paracuaria adunca（ウミスズメ）、右下：線虫の1種Stegophorus stercorarii（ウミスズメ）